



SAIDAIJI JC REPORT

2002年スローガン

ベースボール

～白球を追いかける少年のように～



2003年度 (社) 西大寺青年会議所 スローガン及び基本方針

Challenger

第43代理事長予定者 延原 寛紀

見直そう

私たちは日々「明るい豊かな社会」を築き上げるため、切磋琢磨しながら数々の事業を展開しています。

しかし世の中は我々が考えるよりもずっと早いスピードで変化し続け、それに伴ない青年会議所運動も今までのやり方が本当に今の時代に合っているのか、地域や会員にも正しく評価されているのかを見直す時期がきていると考えます。

厳しい時代だからこそ青年会議所の本質が問われる、だが言い換えれば「チャンス」でもあるのです。

私たちの運動の目的は「明るい豊かな社会」の創造であり、それこそは不動であり、すばらしい未来です。しかし、そこに到達するた



め的手段はひとつではない、時代を見据えた事業を行なっていくと思います。

挑戦しよう

なにか新しいことに挑戦することとは、精神的にも体力的にも相当な労力を必要とします。

しかし、青年会議所という組織こそがベンチャーであり時代の先駆者達の集団でもあるのです。変革を恐れず常に前を見て挑戦し続けること。それこそが我々青年に与えられた特権であり使命でもあるのです。

大志を抱き日々挑戦する気持ちを忘れない仲間と共に。

子供たちの未来

昨今、ニュースや新聞紙上などで問題になっていることなか、大人が自分たちの欲望を満たすために子供を虐待したり放置したり、最悪の場合命まで奪ってしまう。

そんな記事を目にすることが度々あります。なぜ、そんな事が起こってしまうのか、原因はいろいろあるでしょうが、親(大人)としての意識の欠如が一番のような気が

がします。

子供は自分の親には絶対の信頼をおいています、だから親の方も守らなければと思う理屈ではなく本能有り自然なことです。もう一度考えてみましょう子供たちの未来を。

会員の拡大

どんなにすばらしい志を抱いていても、会員がいなければ組織は維持できません。組織がなければ力も半減します。メンバー全員がもっと危機感を持ち会員の拡大に取り組まなければどうなるか、火を見るよりも明らかです。そのような事態にならないためにも、早急に会員の拡大を行いましよう。

まだまだいるはずですが、郷土を愛する仲間が。



大原町黒谷川

吉井川源流の碑

建立式

地球市民委員会 委員長 安藤 修

今年、「吉井川フェスタ2002」のパネル展の開会式と同時に大原町より最下流の西大寺に運ばれて来た「吉井川源流の碑」は流域の人々の手により、その後三ヶ月近くかけて上流へと運ばれ、10月27日、黒谷川の「あかなめ小屋」に建立される事となりました。前日には、それに伴うシンポジウム、懇親会が行われ、「源流の碑」の運搬に参加された各吉井川流域の団体が「吉井川への想い」を酒を交えながら夜遅くまで語る事となりました。



大原町 黒谷川に建立された
吉井川源流の碑
来年は津山に建立予定



乗せて子ども達も参加して約30分の道のりを引き歩く事となりました。「お清めの塩」をまいて準備も整い、来賓の挨拶の後、無事に建立する事ができ、「碑」の建立と同時にその側に子ども達の未来の自分たちに向けてのメッセージを詰めたタイムカプセルが埋められました。このタイムカプセルは、2022年2月22日2時22分22秒以降に開けられるそうです。その後、会場を移動して餅つき大会や地元のお雑煮、鳥鍋がふるまわれ、冷え切った体を温めながら皆さんとの話に花を咲かせ

ておられました。今年で三本目となる「吉井川源流の碑」ですが、この「碑」自体には意味は有りません。大事なものはそれを流域の人々の手により手渡して行く事により生まれる、交流、理解、友情などではないでしょうか、川は上流から下流へと流れ、様々な違った文化、様式、風習を持つ地域を通過しています。先ずは、理解し合わなければ「川をきれいにしよう」という事の一つ採っても一地域で達成するのは難しく、また、他の地域に誤解を招くかもしれません。先ずは語り合う事から始まるのではないのでしょうか。とは言うものの、難しく考えず、目の前を流れる吉井川最初の流れがどんなものか見に行くという事で充分ではないでしょうか。

パソコン研究会開催

総務広報委員会

副委員長 井上 裕嗣

去る10月9日(水) 西大寺商工会議所3階大会議室にて行われた2002年度10月例会会場において、総務広報委員会アワーとしてパソコンの研究会を開催させて頂きました。

企業のIT化もますます進んでいく昨今、私たち(社) 西大寺青年会議所会員内においても仕事でパソコンを利用されているという会員が珍しくなくなっています。しかし、まだ全員がパソコンを仕事に生かせるレベルの技術を持っているかというと、そういう訳でもなく、会員内部においても各会員間のパソコン技術レベルの隔たりは大きくなる一方という

